様式２－１

沖縄国際大学　平成24年度 ＦＤ支援プログラム成果報告書

下記内容により、ＦＤ支援プログラムの取り組みが完了いたしましたので、「ＦＤ支援プログラム成果報告書」にて、ご報告いたします。

報告者氏名	小　柳　正　弘	所属・職名	総合文化学部　人間福祉学科 社会福祉専攻・教授
プログラム名称	社会福祉教育における「ものづくり」実践のための探索的調査活動 －専門演習への農園芸実践導入のこころみ		
実施及び成果の要旨	小柳・知名担当の専門演習Ⅰ・Ⅱを中心に、農園芸・パンづくりといったものづくりについて実践的に学ぶとともに、ものづくりの福祉教育への導入にかかわる問題を検討した。 農園芸については、小柳担当の専門演習Ⅰ・Ⅱを中心に、①必要とされる耕作地を関係部署と調整して確保し、②除草を行い、その一部を開墾するとともに、③ブロック・煉瓦等によってレイズドベッドを設置、④土壌のPHを測定し、培養土、堆肥等を投入し、⑤種まき、苗うえを行い、⑥作物ごとの栽培方法の資料を小柳が作成し、⑦作物ごとに分担して学生に⑧水まき等の管理と⑨作業日誌の作成を行わせた。 パンづくりについては、知名担当の専門演習Ⅰ・Ⅱを中心に、⑩事業所の協力を得て、⑪製作・作業を体験させた。 年度末、農園芸・パンづくりといったものづくりを社会福祉教育に導入することにかかわる諸問題について、小柳・知名で検討をおこなった。 その結果、耕作適地の確保や、安全で安定した資材等の搬入、用地や気候にあわせた適切な栽培方法の判別、（継続的な作業と節目ごとのまとまった作業という）農園芸のありかたと（週１コマという専門演習の）授業時間とのギャップ、調理経験の欠如など、社会福祉教育にものづくり実践を導入するにあたっての課題が具体的に種々あきらかになったほか、「学生も教員も、実践的な試行錯誤を継続し、ものづくり自体のスキルを向上させなければならない」「プロジェクト自体を学生が主体的にになり、それらが福祉においてどのような意味をもちうるかを学生自身が検討する力を涵養するような、ワークショップ型の授業の設置など、ものづくり実践にみあったカリキュラムの改編を検討する必要がある」といったことが示唆された。		
実施期間	自：　2012　年　4　月　1　日 至：　2013　年　3　月　31　日		

※共同実施者（2人以上の場合は、別紙添付のこと）

申請者氏名	知　名　　孝	所属・職名	総合文化学部　人間福祉学科 社会福祉専攻・准教授
申請者氏名	印	所属・職名	

目　　的	社会福祉の現場では、農園芸や食品製造といった「ものづくり」が就労支援の一環や福祉的就労としてさまざまな目的で導入されている。しかし、学生たちにはそのような経験がほとんどないのが現状である。そのため、「ものづくり」実践を社会福祉教育にどのように導入すればよいのかについては検討が必要とされている。このプログラムは農園芸やパンづくりを中心に、社会福祉教育に「ものづくり」実践を導入する際に、どのような問題が生じるかを実践的に探索しようとするものである。
活動内容	小柳・知名担当の専門演習Ⅰ・Ⅱを中心に、農園芸・パンづくりといったものづくりについて実践的に学ぶとともに、ものづくりの福祉教育への導入にかかわる問題を検討した。 農園芸については、小柳担当の専門演習Ⅰ・Ⅱを中心に、①必要とされる耕作地を関係部署と調整して確保し、②除草を行い、その一部を開墾するとともに、③ブロック・煉瓦等によってレイズドベッドを設置、④土壌のPHを測定し、培養土、堆肥等を投入し、⑤種まき、苗うえを行い、⑥作物ごとの栽培方法の資料を小柳が作成し、⑦作物ごとに分担して学生に⑧水まき等の管理と⑨作業日誌の作成を行わせた。 パンづくりについては、知名担当の専門演習Ⅰ・Ⅱを中心に、⑩事業所の協力を得て、⑪製作・作業を体験させた。 年度末、農園芸・パンづくりといったものづくりを社会福祉教育に導入することにかかわる諸問題について、小柳・知名で検討をおこなった。
成果･結果･効果	社会福祉教育に「園芸福祉」や「パンづくり」実践を導入するにあたっての課題が種々あきらかになった。上記活動内容①～⑪にあわせて抽出された問題の一例を列記する。 ①②③耕作適地の確保に困難がある。確保された用地を耕作したところ浅いところまで樹木の根が張っていてそのまま農地とすることができなかった(レイズドベッドの設置で対応)。 ④⑤安全で安定した資材等の搬入に困難がある。担当教員が２トントラックを借用するなどして培養土やブロック等を搬入せざるをえなかった。 ⑥用地や気候にあわせた適切な栽培方法の判別に実践的な試行錯誤が必要とされる。前期は虫害などで無農薬栽培には不適。台風による被害や夏休み中の管理が行き届かないことから、後期を中心に作業を行うべきであった。 ⑦⑧⑨農園芸には毎日でも行うべき継続的な作業と節目ごとのまとまった作業があり、いずれに対応するのにも週１コマの授業時間では困難がある。そのため、作物の選定や育苗など農園芸の重要な部分を担当教員がになうことになり、教育的な効果が低減した。 ⑥～⑨との関連で芋類や観葉植物が素材としやすいものであることがわかった。 ⑩⑪調理経験がまったくない学生が少なからず存在し、現場で必要とされる作業の指導・援助以前に、学生自身が調理を主体的にになうことができないことがあきらかになった。 農園芸・パンづくりといったものづくりの経験は体験した学生に好評であった。ただし、プロジェクト自体を学生が主体的にになうとか、それらが福祉においてどのような意味をもちうるかを検討するといったことについて、学生が見識を深めるといったレベルには到達できなかった。
今後の展望	学生も教員も、実践的な試行錯誤を継続し、ものづくり自体のスキルを向上させなければならない。 そのうえで、プロジェクト自体を学生が主体的ににない、それらが福祉においてどのような意味をもちうるかを学生自身が検討する力を涵養するような、ワークショップ型の授業の設置など、ものづくり実践にみあったカリキュラムの改編を検討する必要がある。